



Liang YaXuan

梁 亜旋

現代芸術家

過去との対話が叶った
その瞬間の印象・感情を
鮮やかに描く。

貴重なことがらや、ひっそりと
受け継ぐべきことがらを記す
ために用いられた巻子本（巻
物）にロマンを抱く、梁亜旋。
記録に残りにくい、庶民の暮ら
しぶりや民間信仰の様子が描
かれた絵巻をとおして、過去の
人々と対話し、新しい表現を以
て現代に伝える。

AIR就任期間 2018年7月～

梁亜旋 紹介ページ

https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/ryo/index.html



中国生まれ。2017年、年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科大学院修士課程修了。宝塚大学東京メディア芸術学部元助教。アートプロジェクト「Recreation of Asian Traditional Arts Project (RATAP)」創立者。現在はアーティストとして活動しながら、アジアの伝統民間芸術に関する保護と研究も熱心に行う。

梁 4 「NO.1」



梁 5 「NO.2」



梁 6 「NO.8」



梁亜旋「FUNNY FACES」series
「NO.1」「NO.2」「NO.8」(2020年)

絵画作品(ミクストメディア 530mm×455mm)

古典籍に描かれた「顔」を、「人間」「妖怪」などのタグで検索できるデータベース「顔貌コレクション」を活用して面白い顔を選び、初見の印象を、色彩や描線を以て拡大して描いたシリーズ。古典籍における絵画の筆遣いに関心を抱き、輪郭線を際立たせる。「NO.1」「NO.2」は、江戸時代後期の絵本『神事行灯』、「NO.8」は絵巻『虫物語』がモチーフ。



庶民の文化を今に繋ぐ

意識的に残される機会がないため、中国農村部の伝統文化や美術がだんだんと忘れ去られてゆくことに危機感を持ち、自身の表現をとおしてそれらを発信することを目指している梁さんが、ワークショップで出会った日本の絵巻には、公的な資料では残りにくい、かつての暮らしの風景や民間信仰が、鮮やかに描かれています。

梁さんが最初に創作のモチーフとしたのは、絵巻『百鬼夜行図』。夜中に京都を練

梁 2



梁亜旋「Ghostly」(2019年)

インスタレーション作品(巻物、アクリル板、ワイヤー、LEDライト、蚊帳)

絵巻の持つ神秘性に惹かれた作品。暗い部屋で、絵巻「百鬼夜行図」(80~81頁)を見ていると、妖怪達が巻物から飛び出してきた、というイメージから作られた。上から吊るした妖怪の姿(アクリル板製)がライティングされることにより、空中に妖怪が浮かび上がり、床面に広げた白紙の巻物に映り込む。



梁亜旋展「Inheriting and recreating the classics 古典から再構築へ」

東京都千代田区の文房堂ギャラリーにて開催した個展の様子(2021年1月18日~23日)。「A Mountain」をはじめ、古典籍からインスパイアされた新作を展示。絵巻の描線に着目し、輪郭線を意識的に用いた「FUNNY FACES」など、梁氏にとって新たな表現を切り拓いた作品が多く展示された。また、「顔貌コレクション」を活用し、古典籍の中から面白い顔を探して仮面をつくるワークショップを行った(動画URLは79頁)。

画面処理方法を、三次元での表現に援用した「A Mountain」は、二〇一九年末から猛威を振るい続ける新型コロナウイルスで命を落とした方の鎮魂の願いを込め、チベット仏教において重要視される「聖山巡礼」をテーマにした作品です。

さらに、デジタルアークカイブされた絵巻などから顔を検索することのできるデータベース「顔貌コレクション」を活用した「FUNNY FACES」シリーズでは、日々進化し続ける技術を駆使し、過去と繋がる新たな扉を開きました。



梁亜旋 「A Mountain」 (2020年)

立体作品
(W450mm×D450mm×H650mm
ミクストメディア)

チベット仏教にとって重要な「聖山巡礼」をテーマとし、新型コロナウイルスにより命を落とした方の鎮魂の願いを込めた作品。すやり霞や異時同図法といった、絵巻に見られる画面処理の方法を、立体作品において取り入れるという意欲的な試みがなされている。また、16世紀~17世紀の日本において、布教や寺社への参詣者を誘致する目的でつくられた「参詣曼荼羅」を思わせ、細部を読み解く楽しみも与えてくれる。



り歩く恐ろしい妖怪の行列と、長い年月を経た器物に魂が宿ることとなる「付喪神」のイメージとが結びつき、ユーモラスな道具の妖怪たちが人間のようには練り歩く様子が描かれる絵巻です。

「Ghostly」は、右から左へと絵巻をひらくにつれ、次々と妖怪が出てくる楽しさからインスパイアされたインスタレーション作品で、光と影の効果により、妖怪が絵巻から飛び出す様を表現しました。

一方で、絵巻に見られる、すやり霞や異時同図法といった

ワークショップを経て

巻子本がかつてどのように読まれ、受け継がれたのかといったことについて、最新の研究成果を学び、また、右から左へと少しずつひらいて鑑賞する方法を体得した梁さんは、絵巻そのものが持つ呪術性や祝儀性についての理解を深め、作品創作の基盤とした。付喪神や信仰、人々の暮らしといったさまざまなモチーフに関心を抱き、精力的に追求した新たな表現の成果を、二〇二二年一月、「梁亜旋展 Inheriting and recreating the classics」(於・東京都千代田区文房堂ギャラリー)で発表した。



個展会期中に行ったワークショップの動画
<https://www.youtube.com/watch?v=I7mNp8xrXC&t=1388s>



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#ryo>



- ① 絵巻からインスパイアされた作品についてイベントで語る。
- ② 絵巻の扱い方について学びながら、様々な作品を閲覧。その独特の鑑賞形態は、作品創作に大きく影響した。
- ③ 古典籍の形と内容のかかりについて深く学んだ。

梁 10



ちょうごんか しょう
『長恨哥の抄』 江戸前期写 卷子 3軸 縦32.9cm×全長 上巻1209.9cm、中巻1273.1cm、下巻1173.6cm

万治・寛文頃に刊行された絵入り版本『やうきひ物語』3巻3冊を元にした絵巻。版本の『やうきひ物語』は玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を詠んだ白楽天の詩文『長恨歌』の抄物(解説・注釈)で、仮名草子作者の浅井了意が版下を手がけているが、内容から作者である可能性も指摘される。『長恨歌』の抄物の絵巻は大阪大谷大学図書館蔵本など10点余りが知られている。本書は人物を大きく、容貌もふっくらと愛らしく描くという特徴がある。(糸汐里)

梁 8



うら
『浦しま』 江戸中期頃写 卷子 1軸 縦31.6cm×全長929.1cm

室町から江戸期にかけて多数作られた短編の物語草子、お伽草子の一作品。古代の神仙思想を背景とする「浦島子伝」から派生したお伽草子の『浦島太郎』は、童謡で知られるストーリーと異なり、助けた亀が女と化して浦島太郎を竜宮城へと誘い、2人は夫婦の契りを結ぶ。故郷に帰り、玉手箱を開けてしまった浦島は、鶴になってしまったという。本文には玉手箱から「三筋の紫の雲」が立ち上ったとあるが、挿絵には不吉な赤い炎が描かれる。(糸汐里)

梁 7



ひゃっき やぎょうず
『百鬼夜行図』

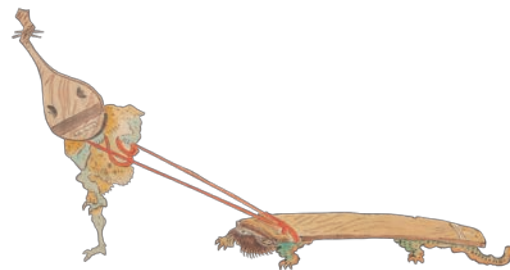
江戸後期写
卷子 1軸
縦 31.4cm × 全長 701cm

百鬼夜行は鬼や妖怪が深夜に大路を練り歩く様を言い、平安京の貴族に恐れられた怪異で、『今昔物語集』などに遭遇譚が見える。室町時代になると、器物や動物の化け物による行進を描いた「百鬼夜行絵巻」が登場し、多くの絵巻に仕立てられた。現存最古とされる京都・大徳寺

真珠庵蔵の絵巻は、江戸時代を通じて盛んに模写され、本作もその一つとみなされる。諸本の多くは末尾の「赤い球体」あるいは「朝日」に逃げ戻る妖怪を描くのだが、本作は残念ながら巻末を欠き、その出現前で終わる。(恋田知子)



ぶんしょう
『ぶんしょう』 江戸前期頃写 卷子 3軸 縦34.2cm×全長上巻1576.3cm、中巻1277.2cm、下巻1500.5cm
ひたちのくに かしまだいぬうじん だいくうじ ぶんしょう
お伽草子。常陸国鹿島大明神の大宮司に仕える男が、塩焼きで富を得て文正と名乗る。授かった美しい娘は帝の后となって皇子を産み、文正は大納言まで出世したというめでた尽くしの物語。正月の読み初めにふさわしいとされ、嫁入り本としても好まれた。それゆえに多数の伝本が伝わる。本書も嫁入り本として制作された一本とみられ、華やかな下絵が施された詞書料紙をもち、人物の装束、調度に至るまで細密な挿絵を有する優品である。(糸汐里)



小論文

魅惑の絵巻

Koida Tomoko

恋田 知子

慶應義塾大学

文学部 准教授

絵巻の源流は中国の画巻がかんに求められるが、日本では絵と物語とが結びつき、「物語る絵」として独自の発展を遂げた。通常縦三〇〜四〇cm程度の紙を貼りつなぎ、九〇〇〜二〇〇cm程度の長さに仕立てられるが、全てを広げて観るものではなく、肩幅ほどに少しずつ開きながら鑑賞された。紙を継いで作られる横長の画面は、部屋の空間として鑑賞する掛け軸などとは異なり、目で全体を把握することができない。自分の手で触れながら開き、巻く動作を繰り返すという、いささか

労力を伴うものであるのだが、それゆえ読者の自由に物語を読み進めることができ、物語世界に感情移入しやすい形態と言えるだろう。絵巻には物語世界に入り込み、より親密に鑑賞できる、さまざまな表現上の工夫も見てとれる。

◆ 物語世界を覗き込む

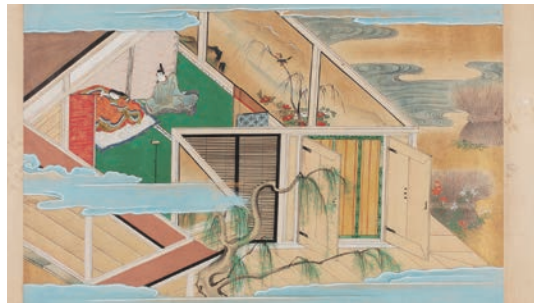
絵巻や絵本、掛け幅絵などには、しばしば帯状の雲や霞を何層にも重ねたものが描き込まれている。「すやり霞」と呼ばれるもので、金箔を細かくした砂子で埋め尽くしたり(『浦しま』80頁)、水色に白の縁取りが施されたり(『ふんしやう』82頁)と、作品によって多様な色や形状で表され、絵師の個性がうかがえる。すやり霞を配置し、俯瞰で情景を描くことで、物語世界を覗き込んでいるような工夫がなされており、些末な部分を省略して描きたい部分に焦点を絞る効果や場面転換の意図などからも盛んに用いられた。物語を俯瞰で描く方法としては、吹抜屋台とい

絵は、子どもでも扱いやすいことから、幼少の読者が想定される。一方、性的な欲望や主従にまつわる葛藤を描いた物語なども伝わっており、小絵の持つ非公的な性格から、文化的教養のある男性による私的な鑑賞を目的とした可能性なども指摘されている。自分だけの絵巻を所有したいという当時の人々の願望が垣間見える。

◆ 妖怪たちのパレード

開くごとに新しい場面が展開する、そんな絵巻の特徴と魅力を存分に味わえるのが、「百鬼夜行絵巻」である(『百鬼夜行図』80～81頁)。器物の妖怪である付喪神は、『不動利益縁起』や『融通念仏縁起』における疫神など、鎌倉時代から絵巻に描かれた。室町時代になると、付喪神や鬼、獣などの妖怪たちが行列する様を描いた「百鬼夜行絵巻」が登場し、数多くの絵巻に仕立てられた。行列それ自体、平安・鎌倉時代の障屏画や縁起絵巻など盛んに描かれ、物語の展

う技法も多用されている。上から覗くのを阻む屋根や壁を省略し、室内の様子を描くのである。文正長者の娘の姫君と中将を描いた掲載図は、燭台の灯火から夜の場面であるところから、襖絵の鴛鴦には仲睦まじい二人の行く末を暗示させ、二人の逢瀬を読者の我々が覗いているかのような構図と言えよう。



『ふんしやう』江戸前期写、卷子3軸のうち下巻第3図。

さらに室町時代後期には、「小絵」と呼ばれる、縦二〇cmに満たない小型の絵巻が作られ、宮中や将軍家、公家の子女の間で流行した(『阿不幾集』114頁)。通常の絵巻の半分ほどで手の中に収まる大きさの小開上必ずしも必要でなくとも、多くの絵巻に取り入れられており、祭礼行列図としての展開も見せる。そこには、当時の祭礼や風流の作り物の反映なども見てとれる。行列は右から左へと時間が流れて空間が移動する絵巻というメディアの特性を活かす画題であった。妖怪の行列を描くのも、次々に多種多様な妖怪を登場させることで、妖怪世界の豊かさを表現したのであろう。

ちなみに、卷子装は古代より正規の書物を保管するのに用いられた。秘伝の書を意味する「虎の巻」は今でも巻物として想起されるように、大事なことは經典しかり、系図しかり、巻物にして伝えられるのだ。それは手にした者以外には中身が見えず、巻くことで内容を封じ込めることができる巻子の特性による。この巻子の持つ秘匿性に注目するならば、諸本の大半が冊子ではなく巻子に仕立てられた「百鬼夜行絵巻」には、妖怪たちを封じ込める意味をも読みとることができないのではないか。